

0. まえがき

申し訳ありませんが、日本人らしく、言い訳から入らせていただきます。

囲碁を幼少期から学ぶメリットについて、実際に幼少期から囲碁を学んだ者が語ることは、リアリティーがあると同時に、単なる自慢話になる恐れがあります。それを知っているながら書くことに、抵抗を感じていないわけではありません。

日本ではエリート教育があまり表に出てくることはありません。私も大学にいて研究教育に携わっていますが、いい教育を受けてきたのだろうと感心させられるような若者に何人も巡り合います。それぞれ個別の優れた教育を個人の中で咀嚼してきているわけであり、ハウツーで語れる要素はほとんどありません。

私よりもこのテーマで文章を書いたほうが良い方々がおられます。一つは囲碁のプロ棋士で、まさに幼少期から囲碁漬けの日々を送っていて、日本語より先に囲碁を覚えているように見受けられます。第二の候補は囲碁の観戦記者などのライターの方々です。しかし、いずれも、囲碁を他人にあるいは子供に勧めることによって、間接的に利益を得ると見られかねないため、そのためにためらいがあって、これまでこのようなことが書かれていないのかと推測します。

私自身は、小学 1 年生のころから囲碁を始めましたが、現在の生活基盤は囲碁から切り離されているため、そのようなことを勘繰られることなく、意見が述べられると考えた次第です。

1970 年生まれ

小学 1 年の頃、囲碁を父から習う

小学 2 年の秋、碁会所に通い始める。芦屋市内の「卒啄」。1 日に 1 回くらい、碁会所の常連さんがコーラをごちそうしてくれるのが嬉しかった。そのうち、うどんなどの出前をごちそうしてもらっていた。

小学 4 年 第一回少年少女囲碁大会小学生の部 兵庫県優勝、

上京し、安藤武夫先生宅を訪問、依田紀基初段（当時）に 4 子で挑戦、完敗。

この後、関西棋院養成部に通う。同時期に新垣朱武八段ら。また、佐藤直囲碁教室に通う。

同門に出雲哲也、中村智佳子、結城聡、前田亮、坂井秀至ら。

小学 5 年 第二回少年少女囲碁大会 兵庫県第二位、全国第三位

小学 6 年 兵庫県大会で敗退

中学 1 年 兵庫県代表、

中学2年 兵庫県代表、全国第二位
中学3年 受験のため欠場（1年間、学習塾に通う、灘高校合格）
高校1年 兵庫県代表、全国団体戦第5位
高校2年 兵庫県代表 全国団体戦第2位
高校3年 兵庫県代表、全国団体戦第2位、全国個人優勝、夏休み2週間の中国遠征、東大合格。
大学1年 朝日アマ十傑戦東京代表、学生本因坊戦準優勝、
大学2年-4年 学生団体戦全国優勝

他にも、これまでに二人の息子を育てている、ということ挙げたいと思います。2009年末現在、高校生と中学生で、紆余曲折ありながらも何とか育ててきており、私なりに努力してきました。

教職にあるものとして、若者の考え方、感じ方を理解しようと心がけていますが、半ば趣味的に若者の観察をしています。教育あるいは若者に関する著書を積極的に読むようにしています。

教育の専門家が親の視点からの教育論を書きにくい理由も想像できます。小学校を覗んでの幼児教育、中学を覗んでの小学校教育、大学を覗んでの中学・高校の教育については、それぞれ教育の現場等で尽力されている方がおられると思います。しかし、幼少期から大人になるまでを俯瞰して教育論を書くのは至難の業であろうと思います。

また、子育てに失敗したと思う親は、恥をさらすよう書きにくいでしょうし、うまく子供を育てられたと感じている親としては、ところどころで言いたいことがあったにせよ、うまく育ててくれてそれで満足、というわけで、子供が大きくなってしまっただけからは言いたいことの情熱も醒めてくるのでしょう。

ここにあげているものは、これまでの囲碁関係の友人、囲碁以外の友人、大学で教育しながら感じたこと、あるいは二人の息子を育てながら感じたことなどなどから私なりに考えた話になります。

自分の幼少期と、現在の知育を考えることから、必然的に、世代間の差異を囲碁のせいにしてしまっているかもしれません。私なりに公平を期し、世代間の違いを囲碁のすばらしさに曲解しないように心がけましたが、明確な区別ができるはずもありません。

個人的に囲碁を知っていて良かったことは無数にあります。年上の人と話をするのに苦労しない、俯瞰的視野を常に保って物事を眺められる、などなどありますが、実際は友人です。事実、私の幼少期から今も続いている知り合いは、血縁関係か囲碁関係です。

1. わが子のために、親ができること

こどもが誕生すると、親戚を巻き込んだ一通りの大騒ぎの後、可愛いが手がかかる赤ちゃん時代、心と体の成長が目に見えるバブバブ時代を経て、よその子と比べながらわが子を観察してしまう時代になります。だいたい4歳くらいでしょうか。わが子に何か習いごとでも始めさせようか、という夢の時代（別名親バカの時代）でもあります。

子供との会話では、習いごとを勇気づけるため、あるいは自分も楽しむために、夢のような目標を口に出せる時期です。モノより思い出、という見事なキャッチフレーズで車を売るCMではありませんが、この夢の時代を大切にしたいと思いました。だいたい小学校の低学年くらいまででしょうか。小学4年生くらいからは、習いごとを縮小し、中学受験に照準を合わせる家庭が多いと思います。

現在の育児現役世代の方々には、受験を経験している方が多く、受験勉強において先行逃げ切りが簡単でないことを経験的に知っていると思います。つまり、幼少期から露骨に受験準備に入るのは考えものです。

また、「夢の時代」と言いましたが、実にさまざまな問題が起こることがあります。親同士の常識にもずれがあるので、幼稚園などでは子供同士では常識がぶつかり合っているはずですが、その調整は、大人がよく把握できないうちに隠微に行われているはずで、家庭での常識の観点からは外での扱いを理不尽に感じ、逆に外の観点から見れば家庭で信じ込まされていたルールに疑問が見えたりと、子供には、多分さまざまな苦労があるのだと思います。この時期をうまく乗り切れなければ、子供は親と気持が一致なくなり、小学校の中学年くらいからいろいろと大変になります。自分の将来から目をそむける子、とくに主体的には夢もないが親の言うとおりとあえずは「中の上」を目指す受験をわが身に引き受ける子、という不機嫌なクラスが小学校に出現し、いろんな問題が生じやすくなるのではないかと感じます。

2. 対ゲーム機でなく、対人でゲームをすることの重要性。

私が子供のころ、親戚や近所の大人から「良い子だね」と言われるのは、大人の言うことを聞き、大人しくしている時であり、勉強ができたリスポーツが出来たりした時に「良い子」とは言われませんでした。つまり、昔は「良い子」というのは「大人しい子」と同義で、親の手を煩わせない子を指しました。現在、ほぼすべての子はゲーム機を与えれば「良い子」になります。生まれながらの将軍と言ったのは徳川三代将軍家光ですが、今の子供は生まれながらの消費者です。育児で楽をしたい親がおもちゃを買うことで妥協し、こどもの可能性を台無しにしている。日本でふつうに育児していたのでは、TVゲームをしている間は大人しい子供が量産されていきます。そして、日本ではかなりの家庭で「良い子」が出てくることになっていますが、はたしてそれが良いことか。

ゲーム機を相手にゲームしては、負ける悔しさを経験できません。ゲーム機のゲームはリセットが可能で、何度もやり直しができるため、口惜しいという感覚は生じにくい

でしょう。サッカーを見ていて、結果的に勝ったほうを応援していたことにする、というのは幼い子供によくあるちょっとしたズルです（これはこれで可愛いものです）が、そのようなズルができない経験をたくさんしておくことは一方で重要でしょう。現在の義務教育の中では、子供のために負けを認めなくてよい世界を作りたがる。その結果、社会に出るまで負けることの意味を知らずに育ってしまうという結果になっているのではないか。口惜しい気持ちを抱かせないのが良い教育、というのは、現場の教育者がトラブルを避けるのに汲々として教育効果を犠牲にしており、教育の放棄に近いのではないかと思います。

本気になることの重要性は、大学で教育をしていて特に強く感じます。私が勤めている大学には、愛校心からか、本学の大学生の素質は世界一である、と豪語する先生もおられます。実際、私の手元で育てた学生を海外に修行に送り出すと、非常に高い評価を得て帰ってきます。

日本の学生は優秀であるが、本気にならないようにする用心深さがあだになる。勝負を避ける習性がついているが、これは損。

口惜しさは、見直しをする習慣を促進します。負けて口惜しいからこそ、これで本当に大丈夫か、という意識を持つのです。私は見直しという作業が嫌いなほうですが、囲碁のおかげである程度見直しをするクセが身に着いたと思います。ちなみに、見直しこそ、受験を乗り切る決め手です。「うちの子は才能はあるのだけれど」と言って成功しないのは、ほとんど見直しができないタイプだと思います。学習塾の講師をしている友人が、中学受験について、問題を解いた後に自分で見直しができるこどもが勝つ、と言っていました、私も賛成できます。

囲碁は一局打つと、勝ち負けという結果が出る。「負けました」と認めざるを得ない経験を必ずします。

私は親戚の反対に遭いながらも、子供のゲーム機の禁止を推進しました。それが良かったかどうかわかりません。息子たちも友人と話題を合わせるのに苦労したと推測します。「夢の時代」の育児の中で、息子の周りがゲーム機で支えられた「良い子」集団であったことは、非常に厳しい環境条件でした。

代わりと言ってはなんですが、我が家では、ポケモンカードゲーム（対戦型カードゲーム）を子供と一緒に良くプレイしました。勝負は常に真剣勝負です。

3. 大会に出ることの教育効果

囲碁については、試合の経験も子供のしておくべき経験という意味で重要です。たとえば、学芸会の演劇や楽器の演奏も本番を経験することは非常に意味がありますが、だいたいの場合、終われば先生が褒めてくれるのが通例です。勝ち負けが非常に重要である、また、勝つことが保証されていない状況、というのは、現在の日本の教育現場では得難い状

況です。

囲碁の場合、対局中には囲碁に関する会話は一切禁止され、試合の公平性が担保されると同時に、そのために醸し出される雰囲気から自ずと集中力が出てきます。日常の努力と、それを発揮することのできる場、この時間のメリハリが非常に重要な教育効果につながります。

ところで、私も集中力がある、と言われたことはたびたびありますが、私の感覚で言えば、碁打ちの言う集中力と、世間で言われる集中力は意味が異なると思っています。世間の集中力は、囲碁の世界で言えば、まじめにやる、という程度のことに相当しているような気がします。たとえば学校で授業を聞くとか。囲碁の集中力というのは、それはそれはすごいもので、財布を無くす、雷が聞こえない、およそとんでもないことを聞いたことがあります。

また、人間生活のバイオリズムとして、集中力を保つのは1日に5分間を3回というのが私の限度ですが、プロ棋士は週に1日間集中力を保つというリズムを作っているように見受けられます。実は、この辺りにも、日本の棋士が国際棋戦に弱い事情があるような気がします、それと善悪は別の問題です。

なお、個人的には、自分の集中力は一日5分を3回出せばそれで十分で、それ以外の時間帯はそこそこ注意力があれば社会人として十分に勤まるとは思います。もちろん、職種、立場ごとにいろいろ異なるとは思いますが。

4. 他でもなく囲碁をお勧めする理由

1) 囲碁は個性を発揮できるゲーム

チェスや将棋はコンピューターの軍門に下りそうですが、囲碁はまだまだ人間の個性が必要です。そのためか、アジアのみならず欧米で囲碁が普及しているのも、囲碁のメリットを強めるのではないのでしょうか。ビルゲイツは囲碁が好きと聞いています。

スポーツはスポーツの良さがあるでしょうが、対個性という意味では囲碁は広いから良いです。足の速さ、体の大きさに決まるもので、子供に口惜しい思いをさせたくない、ということもあるでしょう。イチローはともかく、松井に「努力すれば報われる」と言われても、体格の違いは埋められないでしょ、と言いつつ返したいところです。

囲碁はどうか。有名税ということで実名を挙げさせてもらえば・・・

依田紀基 繊細かつきれいな碁を打たれます。筋を通し、信念を通し、芸術的営為の向こうに勝利が自ずと存在する、というかのように。しかし、実生活は非常に不器用で、いわゆる学校の成績も非常に悪かったと聞いています。天が囲碁を与えた、というような配剤の妙を感じます。

山下敬吾 線の太い碁を打たれます。また、現在の実利先行の打ち手が多い中で、布石で四線を多用するなど、流行に流されない強さを持っています。棋風から見て不器用なのか

と思いきや、小学校のころから算数は非常に優秀であったと聞いています。囲碁がなければ、優秀な一匹狼としてどこかで活躍されていたことでしょう。

張う まっすぐに勝利を目指す合理的な碁を打たれます。時間の使い方に始まり、形勢が良い時は良い時の、悪い時は悪い時なりの最善手というか、最大勝利確率を見極めて最大限の努力をされているように見受けれます。囲碁自体がすばらしいゲームなのだから、その中で勝利を目指す以上に崇高なことがあるのか、と問うてでもいるような迫力を感じます。囲碁がなければ、いつでもどこでも頼れる有能な人材となっていたことでしょう。

このように、トップレベルでもこれだけ個性が違っているわけですから、囲碁の神様も個性豊かなのではないかと想像してしまいます。

2) 自己管理能力の向上

現代の学校教育には、リーダーシップを育てる素地がありません。良くも悪くも、学校では生徒が全員平等というのが建前です。自己管理やクラスを引っ張る人材を育てたいなどの謳い文句は、所詮お題目にすぎません。先生の側も、どのような正当な理由で生徒のことを気に入っても、公的な活動ではひいきすることはできず、そのことを生徒の側も良く分かっていて、取っても空っぽのリーダーシップなど取れない、と醒めたものです。

なお、ここでリーダーと言っているのは、キャンプファイヤーのときにフォークギターで盛り上げる人材でなく、いざというときに頼れるというか意思決定を委ねられるという意味で、指揮官というほうが語感としてはしっくり来ます。ムードメーカーとリーダーが混同して用いられる傾向があるからかと思いますが、周囲の人間を引っ張ると同時に意思決定をする能力かつその結果責任を負う覚悟が必要です。囲碁は個人でプレーするものですから、他の人間を従えるという意味でのリーダーシップは関係ありません。しかし、成人する前に備えておくべきリーダーシップというのは部下を動かすことではないと思います。

まずは、囲碁もゲームですから当たり前ですが、当事者責任があります。逆に、普通すぎて現在の大人には自覚されていないかもしれませんが、現在の子供にはその当事者責任を持つ機会が少なすぎて、自分の成績も他人事のように喋っています。それを聞いているところの方が不安になることがあります。あるいは、今この文章を読んで会社の部下の顔を思い浮かべた方もおられるかもしれませんが。

囲碁の場合、ある程度の棋力になると、打った碁の並べなおしをします。先生にこの手は良い手、この手が悪かったと言われるわけですが、これはなかなか得難い経験です。面と向かって否定的な言葉をもらうことにより、現実から目をそむけることなく、客観的な判断を下そうとするタフな精神が育つのです。

3) 背中を見て技を盗む、能動的に習う経験

受験目的の学習塾による学習は、高度に発達しています。すこしでも良いところに合格させるための手段として、最善を尽くすというのは大切かつ立派な営みであり、塾側の努力をあしざまに言うつもりはありません。しかし、たとえば大学受験の突破だけを目標にして、かつ、それをこどもの側がその思考回路の中で世界観を形成してしまうと、大学に入学してから戸惑うことになりかねません。たとえば、まだ習ってない内容を知っているのが当然とされたとき、「習ってないから知らなくて当然」という態度になってしまいます。大学であればそれでも通用するかもしれませんが、社会人としてはやはりこのままではまずいと思います。では、いつからこのような他人依存の学び方から抜け出せるのか。

囲碁はゲーム自体が奥深く、いくら技を教えてもその技を繰り出す場面を的確にとらえなければなりません。学んで実践で試し、身につける。あるいは、相手にやられた技を習得して身につける、など、能動的に学ぶ姿勢が身につけていきます。自分がまだ学んでいないことを求められたとき、「習ってないからわからない、これを知っておかなければならなかったのに、自分はまだ身に着けていない、どうやって追いつこうか。」とってくれるのではないのでしょうか。

4) 一手一手と人生訓

囲碁は一手交代に打ちます。基本的には、一手打つとそれだけ良くなり、一手打ち返されるとその分悪くなり、ということが延々と繰り返されます。そこで、高度な考え方としては、一手あたり十分に得をしたか、という効率重視の考え方になります。古風な教育観からいえば、子供のくせに効率重視というのはけしからん、ということになりますが、努力の重要性については別途考えればよいわけで、効率が良いこと自体は罪ではありません。

一手分の価値があるか、という考え方は、一日分の価値があったかという問いにつながり、自分の一日には一日分の進歩が必要という考え方につながります。今日の自分より、明日の自分のほうが頭が良くなっていなければならない、という自覚を持たせるのは、意外に難しいです。勉強やれと言うのが勉強をさせる技術ではありません。明治時代の留学生は、坂の上の雲ではありませんが、自分が一日遅れば国が一日遅れる、という自覚のもと努力していたということです。それだけ頑張ってもらったおかげで今の繁栄があるという、一人の日本人としての感謝とともに、幸せだっただろうな、という感慨もないわけではありません。このように、一手の価値を一日の価値に置き換える思考回路が定着すれば、自分の日々の管理につながります。プロ棋士は、今日一日で強くなったか、という問いを自分に発してしまうのかもしれない、そのためか、お酒を飲む人が多いように思います。私はプロ棋士とお酒を飲むのが大好きです

一手の価値については、なぜそこに打ったのか、という問いに答える必要が生じます。実際にこの問いに答えられる小学生はいないと思いますが、問いに対する答えはあるべき、という世界を身近なものに感じておくことは重要です。

5) ためらわないように

囲碁は面白いもので、これを知らない人には教えてあげたいと、囲碁好きの人は常々考えていると思います。囲碁をする人、しない人の間に、もしかしたら「バカの壁」があるのかもしれないと気にしています。囲碁を知らない人から見れば、碁を習うということは、自分の立場を危うくして初心者として新しい仲間に加わるというのが釈然とせず、あまり気楽に始められないかもしれません。現に進めてくれているその友人に対して、棋力で劣っているところから人間関係を始めなければならないことに納得が行かない、というところでしょうか。私の感覚としては、一人ひとりが常に平等であると思っていないのですが、消費者として、あるいは市民、学校のクラスの一員としての権利を主張する世界に囲まれていると、そのような強弱に違和感があるのかもしれません。まあ、大人はまだしも、子供はこのようなことを考えずに囲碁を始められるので、気にする必要もないのでしょうか。

育児に関連して読んだ書籍：今後、書評を入れていければと考えています

- 1) 伊東 乾 バカと東大は使しよう 朝日新書 2008
- 2) 梅田望夫 ウェブ進化論 ちくま新書 2006
- 3) 梅田望夫、平野啓一郎 ウェブ人間論 新潮新書 2006
- 4) 河添恵子 エリートの条件 学研新書 2009
- 5) 小島貴子 就職迷子の若者たち 集英社新書 2006
- 6) 小谷野敦 退屈論 河出文庫 2007
- 7) 佐藤博樹、武石恵美子 男性の育児休業 中公新書 2004
- 8) 澤口俊之 わがままな脳 筑摩書房 2000
- 9) 鈴木謙介 カーニヴァル化する社会 講談社現代新書 2005
- 10) 鈴木謙介 ウェブ社会の思想 NHK ブックス 2007
- 11) 鈴木孝夫 日本語教のすすめ 新潮新書 2009
- 12) スティーブン・ピンカー 言語を生み出す本能、上・下 NHK ブックス
1995
- 13) スティーブン・ピンカー 心の仕組み、上・下 NHK ブックス 2003
- 14) スティーブン・ピンカー 人間の本性を考える、上・中・下 NHK ブックス
2004
- 15) 先崎 学 小博打のススメ 新潮新書 2003
- 16) 竹内 洋 教養主義の没落 中公新書 2003
- 17) 竹内 洋 ほか 論争・東大崩壊 中公新書ラクレ 2001
- 18) 恒吉僚子、S.ブーコック 育児の国際比較 NHK ブックス 1997
- 19) 内藤朝雄 いじめの構造 講談社現代新書 2009
- 20) 西村 肇 人の値段 講談社 2004
- 21) 原田曜平 近頃の若者はなぜダメなのか 光文社新書 2010

- 22) 日垣 隆 父親のすすめ 文春新書 2006
- 23) 東 浩紀 動物化するポストモダン 講談社現代新書 2001
- 24) 東 浩紀 ゲーム的リアリズムの誕生 講談社現代新書 2007
- 25) 東浩紀、北田暁大 東京から考える NHK ブックス 2007
- 26) 廣中直行 快樂の脳科学 NHK ブックス 2003
- 27) 深田和範 「文系・大卒・30歳以上」がクビになる 新潮新書
2009
- 28) 三浦 展 下流社会 光文社新書 2005
- 29) 三浦 展 下流社会 第2章 光文社新書 2007
- 30) 三浦 展、原田曜平 情報病 角川 One テーマ 21 2009
- 31) 吉川 徹 学歴分断社会 ちくま新書 2009